文化

「横光利一と関西」を見直す

フォーラム京

龍谷大教授　田口　律男

都市の印象、表現の源泉に

横光利一（一八九八―一九四七年）は、二十世紀の両大戦期に、日本文学のフロントラインを駆け抜けた小説家のひとりである。『蠅』『上海』『機械』『旅愁』といった代表作は、こんにちの読者にも刺激をあたえ、再評価の声もたかまっている。

「横光利一文学会」（代表、伴悦・元国士舘大学教授）は、その横光を中心に、はばひろく「昭和」の時代と文学を研究する目的で設立された。このたび、大阪教育大学でひらかれた第六回大会では、没後六十年を記念して、「横光利一と『関西文化圏』」を企画し、さまざまな角度から、横光利一と関西とのつながりを検証した。

これまで横光と関西とのかかわりは、一部の研究者や郷土史家をのぞいて、あまり注目されてこなかった。しかし横光の作品や年譜には、「関西文化圏」とかかわるものが深く刻みこまれている。そもそも横光の父は、新逢坂山トンネルや琵琶湖疏水などの工事にたずさわった人物である。三重県伊賀市出身の利一の母親との出会いも、関西本線加太トンネルの工事が関係している。父の仕事は、鉄道事業という国家プロジェクトの末端をになうもので、その仕事に従い、各地を転々とした利一には、いわゆる故郷なるものがない。しかし、幼少期の多くをすごした柘植（現・伊賀市）、伊賀上野（同）、大津、山科などは、彼の原風景となり、いわば横光文学の臍の緒となった。初期作品には、琵琶湖や疏水の流れるのどかな風景がくりかえし描かれている。

しかし、横光にとっての関西は懐かしいだけの場所ではなかった。たとえば一九一五年、三重県立第三中学（現・上野高校）五年生のとき、修学旅行でおとずれた大阪の印象をつぎのように表象している。「間断もなく白日を呪ふ地獄の様に渦巻を張らした煤烟」、「立体、そして又立体」、「工場の機械の激しい叫喚、鋼鉄を叩き延ばす様な強烈な、乱雑な反響」――こうしたレトリックを駆使したさん新な文体は、第一次大戦の余波をうけた「大大阪」のダイナミズムに鋭く感応したものである。

また一九二〇年代には、阪神間にもよく足をのばしている。当時の神戸は、大衆文化がはなひらくモダン都市であると同時に、川崎三菱大争議の舞台となった職工たちのひしめく工業都市でもあった。のちに横光は、「『新感覚派』の驍将」とよばれるが、新感覚派がめざしたのは、資本が生みだす「都市」のダイナミズムを、新しい言語形式によって表現することであった。従来、横光と「都市」との関係は、東京を中心に議論されることが多かったが、この企画をとおして、当時世界有数の大都市であった大阪や神戸が深く関係していることが明らかになった。

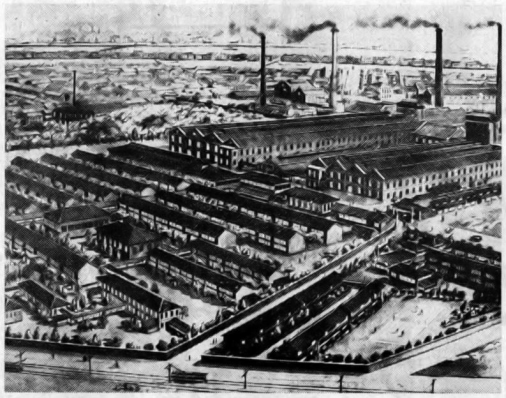
さらにのちの『家族会議』（一九三五年）では、株取引をめぐる東京と大阪との「戦争」をとりあげ、京阪神の華やかな名所を、カタログのように描きだしてもいる。また戦時下においては、西洋合理主義的な知のありように疑問をいだき、日本精神による「近代の超克」を構想するが、その触媒になったのが京都や伊勢神宮であったことも忘れてはならない。

横光利一の文学をとおして「関西文化圏」を検証することは、私たちの来し方行く末を吟味することにつながる。グローバル化のなかで揺れ動くいまの関西を、横光はどうみるだろうか。なおこの企画は、松籟社から一冊にまとめられる予定である。

◇

「横光利一文学会」への問い合わせは、「横光利一文学会ホームページ」、または龍谷大学経済学部・田口律男研究室☎075（642）1111へ。

たぐち・りつお氏　1960年宮崎県生まれ。広島大大学院博士課程単位取得退学。専攻は日本近代文学。編著に「横光利一」、著書に「都市テクスト論」など。



「東洋のマンチェスター」といわれた大阪の紡績工場。横光利一の文学は関西のダイナミスムに根ざしていた（「大大阪画報」より）

歌会

◇五行歌の会木曜歌会

19日後1時半、京都市中京区東洞院六角下ル、ウイングス京都。千5百円。申し込みは今井さん☎075（493）3971。